

神は愛なり光なり  
《 神秘と救いの世界 - 霊界物語 》  
霊界物語 霊主体従  
子の巻（第一巻）

第 17 章 ～ 第 20 章

第十七章 《天界旅行（四）》 [十七]

現代語訳

一、

90 神界の場面が、急に変ったと思へば、私は又もとの大橋の袂に立っていた。どこからともなくにわか①大祓詞の聲が聞えてくる。不思議なことだと思ひながら、二、三百メートル迷いながら尋ねて行くと、五十才ほどの爺さんと四十ほどの婦人とが背中合せに引付いて、どうしても離れられないでいる。男は声かぎりに②天地金の神の御名を唱へているが、婦人は一生懸命に手を合せて稲荷を拝んでいる。男の合掌している天には、鼻の高い天狗が雲の中に現われて爺をさし招いている。婦人のおがむ方をみれば、狐狸が一生懸命山の中より手招きしている。男が行こうとすると、婦人の背中にびったりと自分の背中が吸いついて、行くことができない。婦人もまた行こうとして苦しんで体をくねらせるけれども、例の背中が密着して進むことができない。一方へ二歩行っては後戻り、他方へ二歩行っては、又あともどりといふ調子で、たがいに信仰を異にして迷っている。私はそこへ行って、「惟神霊幸坐世」と神様をお願いして、祝詞を奏上した。そのとき私は、91 自分ながらも実に涼しい清らかな声が出たやうな気がした。

たちまち密着していた二人の身体は離れた。彼らは大変に私を立派な行いをする人として感謝の言葉を述べ、どこまでも私に従って、

『神界の御用を勤めさせていただきます』

と約束した。まもなく男の方は肉体が、一度地の高天原《綾部の大本》に行つて神業に参加しやうとした。しかし彼は元来が大変慾深い性質でありそのうえ、付いている天狗の霊が体から出て行かないため、ついに③盤古大神の家来となり、地の高天原の占領を計略し、そのために、霊は神のつがめを受けて地獄に墮ち、肉体は二年後に滅んでしまった。さうしてその婦人は、今もなほ体は健在で長く神に使っている。

二、

この瞬間、私の目の前の光景はたちまち一転した。不思議にも私はある小さな十字形をした街頭に立っていた。そこへ前に見た八頭八尾の霊の憑いた男が人力車を曳いてやつて来て、

『高天原にお伴させていただきますから、どうかこの人力車にお乗り下さい』

という。しかし「私は神界修業の身分であるから、人力車になど乗るわけにはゆかない」と強く断つた上、92 徒歩でテクテク西へ西へと歩いて行つた。非常に険しい山坂を三つ四つ越えると、まもなくまた広い清い河のほとりに到着した。河には澄きった清澄な水が流れてをり、川の縁には老いた松が青々と並んでいる実に景色のよい所であった。私はこここそ神界である、こんな処に長くいたいものだという気がした。また一人とぼとぼと進んで行くと、ちょっとした小さな町に出た。左方を眺めれば小さな丘があり、山は紫色で河は帯のやうに流れ、④蓮華台上と表現して良いであろうか、高天原の中心と言ってよいだろうか、私はしばらくその風景をうっとりとして見ていて、そこを立去るのをためらつた。

山を降つて少し北に進んで行くと、小さな家が目についた。私は電気に吸い寄せられるやうに、ちその門の入口に着いていた。そこには不思議にも、あの幽界の政庁におられた閻魔大王が、若々しい婦人の姿となって私を出迎へ、やがて小さい居間へ案内された。私はこの大王との再会を喜んで、いろいろの珍らしい話を聞いていると、

三、

急に虎が唸るやうな、また狼が呻くやうな声かぎりが聞えてきた。よく耳を澄まして聞けば、天津祝詞や大祓の祝詞の声であった。それらの声とともに四辺は次第に暗黒の度合いを増してきて、93 当たりを雲が濛々と閉ざし、日光もやがては全く見えなくなり、暴風は急に吹き出し、家も倒れよ、地上のすべての物は吹き散れよとばかり凄じい光景となった。その濛々たる黒雲の中より「足」という年老いた顔の鬼が現われてきた。それには「黒」といふ古狐がついていて、地上を睨みつけている。その時急に河の水が鳴り響き河中より大きな竜が現われ、また

どこからともなく、何とも言い表せない悪魔があらわれてきた。大王の居間も附近も、この時すっかり暗黒となって、暗くて、近くのものでも見分けがつかない暗となり、あの優しい大王の姿もまた暗の中に隠れてしまった。ただ目に見えるのは、激しい風の中で今にも消えようとして瞬いている一つのかすかな灯火ともしびだけである。私は今こそ神を祈るべき時であると急に思いついて、「天照大御神」と「産土神」をひたすらに念じ、悠々ゆうゆうとして祝詞を爽やかな声で奏上した。大空は急に晴れわたり、一点の雲さえなくなった。

⑤祝詞はすべて神の心を和やわげ、天と地と人を調和させる結構な神の言葉である。しかしその言霊げんれいが十分に満ち足り、清く晴れやかであって始めて総ての汚濁と邪悪を取り除くことができるのである。悪魔の94口より唱えられる時はかえって世の中はますます混乱し悪くなるものである。まさに悪魔の使う言霊ことたまは世界を清める力はなく、慾心よくしん（欲深く物をほしがめる心）、嫉妬しつと（自分よりすぐれた者をうらやみ憎む）、憎悪そうお（人をひどく憎む）、羨望せんぼう（羨ましく思い）、憤怒ふんど（いきどおり怒ること）などの悪い心で濁っている結果、天地の神の御心を傷つけるようになるからである。それだから、日本は⑥言霊ことたまの幸はう国と言っても、体も魂も本当に清らかで汚れのない人が、その言霊を使って始めて、世のなかを清めることができるのである。これに反して身も魂も汚れた人が言霊ことたまを使へば、その言霊には総て邪悪分子を含んでいるから、世の中はかえって暗黒になるものである。

四、

さて私は八衢に帰ってみると、さっきの鬼、狐および大きな竜の悪霊は、私を跡から追ってきた。「足」の鬼は、今度は多くの部下を引連れて来て、私を八方より襲撃し、それぞれに口の中から霧吹きのように幾十万本とも数えられないほどの針（暴言）を噴ふきかけた。しかし私の身体は神の護まもりを受けていた。あたかも鉄板のように針を弾ね返して少しの痛みも感じない。身にしみてうれしく感謝のため祝詞あまを奏げた。その声に、すべての悪魔は煙のごとく消滅して見えなくなった。

95 ここでもちょっと言い加えておく。「足」の鬼というのは⑦烏帽子直垂えぼしひたれを着て、ちょうど神に仕えるような服装をしていた。しかし本来非常に猛悪な顔かたちなのだが、一見立派な様子に身を変えている。また河より昇った竜は、すぐ美人に化けてしまった。この竜女は、綾部の大本の大きな使命を受けているもので、大神の天地万有を治め給う方策である世界改造運動に参加するべき身魂であったが、美しい肉体の女と変って「足」の鬼と肉体上の関係結び神界の使命を駄目にしてしまった。竜女に変わったその肉体は、現在生き残って河をへだてた所で神に仕えている。彼女が竜女であるといふ証拠には、その太腿に竜の鱗うろこが三枚もあざとなって現れている。神界の規則は三界に貫き通されている、必ずその結果として自分の身に返ってくるものであるから、神界の大使命を帯びた竜女を犯すことは、神界にあっても、また現界にあっても、後世までも神の謹いとしめを受けなければならぬ。「足」の鬼はその神罰により、その肉体上の一人の子供は耳が聞こえず、一人の女の子は顔一面に菊石のようなあざを生じ、醜い竜はの這はうような跡を残していた。さて女子がまづ死に、つぎにその男子も亡くなった。かれは罪のために国常立尊に谷底に蹴落され胸骨を痛めた結果、霊肉ともに滅んでしまった。こうして「足」の肉体もついに大神の懲らしめを身に受け、96日に日に瘦衰やせおとろえ生活が出来なくなり、肺結核を病んで悶え死んでしまった。

以上の男女は「足」の前妻の子供であるが、竜女と「足」の鬼との間にも、一人の男子が生まれた。「足」の鬼は二人の子供を失ったので、彼は自分の後継者として、その男の子を立てようとする。竜女の方でも、自分の肉体の後継者としようとして焦あせっている。一方竜女には厳格な父母があった。彼らもその子を自分の家の相続者にしようとして離さない。「足」の鬼の方は無理にこれを引とろうとして、一人の肉体を、二つに引きち切って殺してしまった。霊界でかうして引裂かれて死んだ子供は現界では、父につけば母にすまない、母につけば父にすまないと、煩え苦しんだ結果、肺結核を病んで死んだのである。かうして「足」の鬼の方は霊肉ともに一族は断えてしまったが、竜女は今も後継者なしに未亡人の孤独な生活を送っている。

本来竜女と言うものは、海で極めて寒く、また極めて熱い一千年の苦しい修行をし、山中にまた一千年、河にまた一千年を修業して、はじめて人間の世界に生れてくるのである。その竜体より人間に生まれ変わった最初の一生涯は、尼になるか、神に仕へるか、どちらにしても男女の交わりをせず、97穢けがれのない清らかな生活を送

らねばならないのである。もしこの禁じられた行為をあえて行なえば、三千年の堪えがたい苦しい修行もむだとなり再び竜体に墮落する。従って竜女というものは男子との交りを嬉しく思わず、そのうえ美人であり、眼は鋭く、身体はどこかに鱗のような数個の痣を残しているものも偶にはある。このような竜女に対して種々の人間の世界の情実、義理、人情等によって、むりに竜女を犯し、また犯させるなら、それらの人は竜神より恨をうけ、その復讐に会わないというわけにはいかない。普通、竜女を犯す場合は、その夫婦の関係は決して安全に永く続くものではなく、夫は大抵は年若くて死に、女は何度結婚しても、同じやうな悲劇を繰返し、犯した者の子孫は後の世まで、竜神の祟りを受けて苦しまなければならない。

一、

夫婦が信仰を異にすると霊界では悲惨な状態にあるようです。おそらく霊の夫婦ではないのでしょうか。我々は現界のことだけを考え勝ちですが、現界では肉体上の表面しか見ていないが内面の魂（心）は葛藤しているのです。

二、

ちょっとした小さな町は綾部であり、小さな家は竜宮館（開祖のお住まい）です。いよいよと聖師は地の高天原（綾の聖地）に着いて、開祖様に会われました。

三、

言霊が如何に大事かが述べられています。初めの天津祝詞や大祓詞は悪魔が唱えるため言霊が濁り暗黒な世界となりました。特に祝詞は清浄な言霊で奏上げなければ逆効果をもたらします。

ある人が日曜日などは時間があるので、周囲を清めるために窓を開け、そばを通る人にも聞こえるように奏上げるのだと言っていました。その時はなるほどと聞いていたのですが、今この文章を読むと私にはとてもそこまでの自信はなく、天地を穢していないかと恐ろしくなってきます。祝詞は心を清浄めて奏上したいものです。

四、

竜女の話もまた不思議な話です。竜神が人間に生まれ変わるためには三千年という修行をしなければならないようです。川に千年、海に千年、山に千年苦しい修行をした後、初めて人（竜女）として生まれてくるとあります。

「足」の鬼とは金光教の教会使、足立正信です。開祖は単独では布教できなかったため、初め金光教に身を寄せていました。開祖の神徳をしたって多くの人が集まって来たので、足立は開祖を利用して自分の勢力を伸ばそうと企んだのですが、そこへ聖師が現れたので極力排斥しようとしたのです。

「神界の規則は三界に貫き通されている、必ずその結果として自分の身に返ってくるものであるから、神界の大使命を帯びた竜女を犯すことは、神界にあっても、また現界にあっても、後世までも神の謹めを受けなければならない」とあります。竜女にしても「足」にしても男女の仲を一夫一婦と定められた天則に違反したのであり、また神の使命を破ったのであるから、謹め《とがめ》を受けるのは当然でといえます。

## 用語の解説

### ① 大祓詞

ウィキペディアから参照

大祓詞は、神道の祭祀に用いられる祝詞の一つです。中臣祓詞、略して中臣祓・中臣祭文とも言う。

元々は毎年六月と十二月の末日に行われる大祓で、犯した罪（神道の観念による「罪」であり、犯罪とは意味合いが異なる）・穢れを祓うために唱えられた祝詞で、中臣氏が京の朱雀門で奏上していたことから中臣祓の称がある。六月と十二月では異なる文言であったが、六月の方だけが残った。

『延喜式』巻八「祝詞」には「六月晦大祓」として記載されており、「十二月も此に准へ」と注記がある。今日使用されている大祓詞は「六月晦大祓」の祝詞を元にしたものである。

その成立については賀茂真淵は天智・天武朝説を唱え、本居宣長は文武天皇朝説を唱えているが、いずれの説もその原典になる文章がそれ以前の時代には存在したとしている。

当初は、大祓の際に参集者に対して宣り聞かせるものであったが、後に神に対して唱えられるようになった。中世には陰陽道や密教と結びつき、陰陽道の呪言や仏教の經典のように、唱えるだけで功得が得られると考えられるようになった。さらに、唱えれば唱えるほど功得が増すと考えられ、何千回、何万回も唱えるようになり、より唱えやすくするために、大祓詞の要点だけをまとめた「最要中臣祓」「最上中臣祓」が作られた。特に仏家神道、儒家神道で重視され、『中臣祓訓解』『中臣祓風水草』などの大祓詞の注釈書も書かれた。

現在では大祓の際に参拝者自らが唱えるほか、神社本庁包括下の神社では毎日神前にて唱えられている。神社本庁のほか、各種の教派神道・神道系新宗教の一部でも使われているが、延喜式記載のものから内容に改変が加えられており、教団によっても多少の差異がある。

#### \*内 容

大祓詞は、内容から大きく前段と後段の二つに分けられる。

前段は、大祓に参集した皇族・百官に対して「祝詞をよく聞け」という内容の文言から始まる。これは当初の大祓詞が参集者に対して宣り聞かせるものであったことの名残であり、今日の神社本庁の大祓詞ではこの部分は省略されている。次に、葦原中国平定から天孫降臨し天孫が日本を治めることになるまでの日本神話の内容が語られる。そしてそのような国の国民が犯してしまう罪の内容を「天つ罪・国つ罪」として列挙し、そのような罪が出たときの罪の祓い方が述べられる。罪の内容については、今日の「罪」の観念にあわないものが多く、差別的ととられかねないものもあることから、神社本庁の大祓詞では罪名の列挙を省略して単に「天津罪・国津罪」とだけ言っている。

後段では、そのような祓を行うと、罪・穢れがどのように消滅するかが語られる。罪・穢れが消滅する様を様々な喩えで表現した後、四柱の祓戸神によって消え去る様子が述べられる。

#### \*天津祝詞の太祝詞事<sup>ふとのりごと</sup>

前段の最後に「天津祝詞の太祝詞事を<sup>お</sup>宣れ」とあるが、その「天津祝詞の太祝詞事」の内容はどこにも書かれていない。これが何を指すのかについて、国学が興った江戸時代以降、議論されてきた。

本居宣長は『大祓詞後釈』で、「天津祝詞の太祝詞事」は大祓詞自体のことであるとする説を唱えた。賀茂真淵も『祝詞考』で同様の意見を述べている。戦前に神社を管轄していた内務省ではこの説を採用し、その流れを汲む神社本庁でもその解釈をとっている。神社本庁では、前段と後段の間には何も唱えず、一拍置くだけとしている。

しかし、「天津祝詞の太祝詞事」は神代より伝わる秘伝の祝詞であり、秘伝であるが故に延喜式には書かれなかったのだとする説もある。本居宣長の<sup>ほつご</sup>「歿後の門人」である平田篤胤<sup>あつたね</sup>は、未完の『古史伝』の中で「天照大神から口伝されてきた天津祝詞之太祝詞事という祝詞があり、中臣家にのみ相伝されたのだ」という説を唱えている。そして『天津祝詞考』にて、その祝詞は伊邪那岐命が筑紫の日向の橘の小戸の阿波岐原で禊<sup>ひむか</sup>祓をしたときに発した言葉であるとし、様々な神社や神道流派に伝わる禊祓の祝詞を研究しそれを集成した形で、「天津祝詞の太祝詞事」はこのようなものだというものを示している。篤胤が示した「天津祝詞の太祝詞事」は神社本庁以外の神道の教団の多くで「天津祝詞」として採用されており、大祓詞の前段と後段の間に唱えられるほか、単独で祓詞としても用いられている。 【ウィキペディアより】

祝詞の正しい解釈は霊界物語第30巻「天津祝詞解」および、第39巻付録「大祓祝詞解（神言）」、または天声社発行の「祝詞の解説」を参照していただきたい。

#### ② 天地金の神

安政6年（1859年）、備中国浅口郡大谷村にて赤沢文治（前名は川手文治郎）、後の金光大神<sup>こんこうだいじん</sup>が開いた創唱

宗教である。同じ江戸時代末期に開かれた黒住教、天理教と共に幕末三大新宗教の一つに数えられる。

現在の本拠地は岡山県浅口市金光町大谷である（旧町名由来の金光町という地名は金光教の本部があることから付けられた）。祭神は天地金乃神と生神金光大神である。

教主は金光平輝（五代金光様）、教務総長は岡成敏正である。日本を中心に約1600の教会・布教所、45万人の信者を有する  
【ウィキペディアより】

### ③ 盤古大神

第二巻総説に以下のように書かれている

盤古大神塩長彦は日の大神の直系にして、太陽界より降誕したる神人である。日の大神の伊邪那岐命の御油断によりて、手の股より潜り出で、現今の支那の北方に降りたる温厚無比の正神である。

また大自在天神大国彦は、天王星より地上に降臨したる豪勇の神人である《盤古大神と対峙する一方の旗頭》。いづれもみな善神界の尊き神人であつたが、地上に永住されて永き歳月を経過するにしたがひ、天足彦、胞場姫の天命に背反せる結果、体主霊従の妖気地上に充滿し、つひにはその妖気邪霊の悪竜、悪狐、邪鬼のために、いつとなく憑依されたまひて、悪神の行動を自然に採りたまふこととなつた。それより地上の世界は混濁し、汚穢の気みなぎり、悪鬼羅刹の跋扈跳梁をたくましようする俗悪世界と化してしまつた。【2/総説】

一方、中国では宇宙創造神とされている

天祥地瑞 第76巻「支那の開闢説」には

太初には何物も存在して居なかつた。只一種の気が濛々として広がり満ちて居ただけであつた。さうして居るうちに其中に物の生ずる萌芽が始まつて、軀て天と地が現はれた。天と地とは陰陽に感じて盤古といふ

巨人を生んだ。盤古が死ぬ時に其体が色々のものに化して、天地の間に万物が眞はるやうに成つた。則ち息は風雲となり、声は雷となり、左の眼は太陽となり、右の眼は月となり、手足と体とは山々となり、流るる血潮は河となり、肉は土となり、髪の毛や髭は数々の星となり、皮膚に生えてゐた毛は草や樹となり、歯や骨は金属や石となり、汗は雨となつた。又の他の神話によると、盤古が死ぬと、その頭は四岳となり、二つの眼は太陽太陰となり、脂膏は流れて河や海となり、髪の毛は化して草や木と成つたと伝へてゐる。

また更に他の神話によると、盤古の頭が東岳に化し、腹が中岳に変じ、左の臂が南岳となり、右の臂が北岳となり、足が西岳となりしとも伝へてゐる。

#### 天地の分離

太初には天と地とが相混つて、まるで鶏卵の如くにフワフワとしてゐた。その中に盤古といふものが生れて来ると、初めて天と地との差別が出来て、清いものは天空となり、濁つてゐるものは大地となつた。

その後は、天空も大地も、それからこの二つの間に生れた盤古も、段々と生長して行つた。

天は一日に一丈づづ高さを増して行き、地も同じく一日に一丈づづ厚さを加へて行つた。そして、其間に挟まつてゐる盤古も劣らじと、一日に九度姿を変へながら、同じく一丈づづ背が延びて行つた。さうして居る内に、一万八千年といふ永い年月が経つた。その間に盤古の身の丈が延びに延びて九万里となつた。九万里といふ恐ろしいノツポーが天と地との間に挟まる事になつたので、元々相接してゐた此の二つが、九万里ほど隔たつて了つた。天空と大地との間が今日のやうに遠く離れてゐるのは、全く是が為であると い ふ の で あ る 。

【76/日本所伝の天地開闢説】

### ④ 蓮華台上

蓮華台は蓮華座、蓮台ともいう。仏・菩薩の座する蓮華の台座をいう。蓮華は古代インドで最も重んぜられ、ヴィシュヌ神話では、ヴィシュヌ神の臍の中から生じた蓮華の中に梵天がいて万物を創造したという。蓮華台上

はここでは綾部鶴山《本宮山》を指す。【原文注 36】

蓮華台は桶を伏せたような形状をしています。本文に「この台上に上<sup>のぼ</sup>って見ると、四方はちょうど屏風を立てたように青山を廻らし、その麓<sup>ふもと</sup>にはヨルダン河が、布をさらしたように長く流れている。また一方には金色の波を漂わせた湖水が、麓を取囲んでいる。」と書かれています。綾部はまさにこの地形に近いものが有ります。湖水こそありませんが、神苑内にある本宮山は正に蓮華台であり周囲は山に囲まれた盆地で、和知川（由良川）が本宮山の下を布をさらしたように長く流れています。綾部は蓮の花を思わせ、本宮山は蓮の中心にある花托<sup>かたく</sup>で蓮華台上なのです。

空海（弘法大師）が全国を行脚した話は有名ですが、仏教を広める目的以外にも寺を建てる理想の地蓮華台を捜すためであったとも聞きました。どうしても見つからないので現在の地高野山に居を構えたそうです。綾部は神代の聖地であり、神は国祖御再現まで隠しておかれたのでしょう。

本宮山は一名鶴山、桶伏山ともいいます。現在は登ることが禁止されています（残念なことです）。桶伏山と言うように、山の上には足踏みをすると桶の上で足踏みしたような響きを出す場所があります。

⑤ 「祝詞はすべて神明の心を和げ、天地人の調和をきたす結構な神言<sup>しんげん</sup>である」

水鏡 052 「天津祝詞と神言<sup>あまのりとかみこと</sup>」

天津祝詞は岩戸開きの折、天之児屋根命が岩戸の前で奏上せられたのが嚙<sup>くは</sup>矢《物事の最初》である。神言は神武天皇の時代、天之登美命が作られたもので、児屋根命以来此時代迄全然無かつたのである。天津祝詞も神言も共に神世言葉で出来て居つて、それを今のやうな言葉や、文字に翻<sup>ほんやく</sup>訳したのは聖武天皇<sup>しようむてんのう</sup>の時代、常盤<sup>ときは</sup>の大連<sup>おほむらじ</sup>がやつたのである。

玉鏡 616 「天津祝詞と五大父音<sup>ごだいおん</sup>」に

『宇宙にはアオウエイの五大父音が間断なくなり響いて居るが、人々が発する正しからざる言霊によつては之が濁るのであるから、常に天津祝詞を奏上して音律の調節を行ふのである。』

と述べられているが、宇宙に鳴り渡っている言霊と、人間の発する言霊との間には微妙な関連があり、人間の悪い言霊は宇宙に鳴り響く言霊に悪影響を与え、その言霊を濁しその音律を乱すことになる。

そこで、罪けがれが発生すればそれを言霊で改め、これを除去し、宇宙の音律を調整しなければならない。

「人は天地経綸の主体」としての重大任務を帯びているので真っ先に御魂をみがき、正しい言霊を奏上すれば宇宙に鳴り渡る言霊に影響し、宇宙の修祓、潔斎が行われ、宇宙の音律が正しく調節されるわけである。

「天津祝詞」は宇宙観の一切を修祓し潔斎するためののりと」とであるといわれるのは、このいみによるのである。

【祝詞の解説 天声社】

玉鏡 665 「祝詞は一人で」

天津祝詞、神言など、王仁は一人であげたい、大勢の人と一緒に上げると言霊を濁されて嫌<sup>いや</sup>だ。



玉鏡 718 「祝詞奏上」

人間は往々にして無意識に祝詞を奏上することがある。さう云ふ時、祝詞が中途に止まると後が直ぐ出なくなるものである。機械的に祝詞を奏げるのは全く蟬が啼いてゐるのと同じで、ただ轉るだけのやうなものである。これでは本当の祝詞奏上にはならない。又本当の信仰と云ふ 烏帽子 ことは出来得ないのである。祝詞はベンベンダラリと奏上するの<sup>も</sup>宜くないが、駈足<sup>かばし</sup>で奏上するの<sup>も</sup>いけない。



⑥ 言霊の幸はう国

水鏡 009 「言<sup>げん</sup>霊<sup>れい</sup>と言<sup>げん</sup>語<sup>ご</sup>」

言<sup>げん</sup>霊<sup>れい</sup>天地を動かすと云ふのは、瑞<sup>ずい</sup>霊<sup>れい</sup>の言<sup>げん</sup>霊<sup>れい</sup>の事である。言は三つの口と書く。言語の語は、吾の言と書く。人間は男女共に五つの口をもつて居る。言<sup>げん</sup>霊<sup>れい</sup>は天地を動かすけれど、言語は天地を動かす訳にはゆかぬ。

⑦ 烏帽子直垂

直垂

ここでは金光教の神に仕える姿を現している。



## 第十八章 《 霊 界 の 情 勢 》 〔十八〕

### 現代語訳

一、

98 ここで私は、神界及び幽界（地獄、中有界）と現界（現実世界）との関係を少し述べておこうと思う。

神界と幽界とは時間空間を超越して、少しも時間と言う観念はない。だから霊界（神界及び幽界）において目撃したことが、二三日後に現界に現れることもあれば、十年後に現れることもあり、数百年後に現れることもある。また数百年数千年前の太古を見せられることもある。その見える有様は過去、現在、未来が一度に鏡に映じたように見えるものであって、ちょうど過去、現在、未来の区別が無いように見えて、しかもその区別がそうだと推測し明白に断定できるのである。

霊界より観れば、時間と空間、明暗、上下、大小、広狭等すべて区別はなく、皆一様で平に並んで①霊眼（脳裏に映る映像）に映し出されてくる。

ここに私が述べつつある事は、霊界において見た順序のままに来るとはかぎらない。霊界において一層早く会った身魂が、現界ではもっと遅く会うこともあり、霊界で99一層後に見た身魂を、現界（限界は誤字）ではもっと早く見ることもある。今回の三千世界（神界、幽界、現界の三界）の大神劇に際して、桧舞台に立つ霊界の役者たちの霊界での行動と現界での行動は一致するが、私が霊界で観たところとは、時間と言う点では大変に違いがある。

とはいえ私は、一度霊界で目撃したことは、②神劇となって必ず現界に再現してくることを信ずるのである。

二、

さて③天界は、天照大御神の御支配であって、これは後述することにするが、今は地上の神界の混乱状態を明らかにしたいと思う。今までは地上神界の主宰者たる国常立尊は「④表の神諭」に示された様にやむを得ない事情によって、引退なさって居られた。

それに代って、太古において多くの神人から信任を受けて、<sup>くにとこたちのみこと</sup>国常立尊の後を受け継がれた神様は、現在の中国に発生なさった身魂であって、盤古大神という神である。この神はきわめて柔順な方でいらっしやって、決して悪神ではなかった。だから多くの神より多大な望みを囑されておられた神である。今でこそ日本といい、100中国やロシアと、種々に国境が区画されているが、国常立尊の御神政時代は、日本とか外国とかいう差別は全くなかった。

ところが天孫降臨以来、国家といふ形式ができあがり、いわゆる日本国が建てられた。従って大地の<sup>あつ</sup>沫が凝り固まって出来たという海外の地にも国家が建設されたのである。さて、いはゆる日本国が創建され、諸々の国々が分れ出来たとき、中国にお生まれになった盤古大神は、日本にお出でになって国祖の後をお継ぎになった上、⑤<sup>やつおうだいじん</sup>八王大神といふ直属の番頭神を御使いになって、地の世界の諸国を統轄（治め）された。一方、外国には、国土の守護と統治を委任された⑥<sup>くにたま</sup>国魂の神、および番頭神として、国々に⑦<sup>やつおうやつがしら</sup>八王八頭とゆう神を配置された。丁度それは日本の国に盤古大神があり、その下に八王大神が置かれていたやうなものである。日本本土における八王大神は、諸外国の八王八頭を統括（束ねる）し、その上を盤古大神が一手に掌握しておられたが、八王八頭は決して悪神ではない。天から命ぜられて各国の国魂となったのは八王であり、八頭は宰相の位置の役である。こういう状況が、今日、国常立尊御復権までの神界の有様である。

三、

101 そうしているうちにロシアのあたりに天地の邪気が懲りかたまって悪霊が発生した。これがすなはち素盞鳴命の⑧<sup>ことむけやわ</sup>言向和された、あの醜い頭が八つ、尾が八つの姿をしていたのである。この八頭八尾の大蛇の霊が<sup>やつお おろち みたま</sup>霊を分けて、国々の国魂神および番頭神である八王、八頭の身魂を冒し、次第に神界を悪化させるやうに努力しながら現在にいたったのである。さて一方インドにおいては、極めて陰性の邪気が凝りかたまって<sup>きんもうきゅうびはくめん</sup>金毛九尾白面の悪狐が発生した。この霊は各々その霊を分けて、国々の八王八頭の相手方の女の霊にのり<sup>う</sup>憑った。

そして、また一つの⑨邪気が凝り固まって鬼の姿をして発生したのは、ユダヤの土地であった。この邪鬼は、すべての神界並びに現界の組織を打ち壊して、自分が盟主（同盟の中心）となって、全世界を地獄の一つである妖魅界にしようとする。しかしながら日本国は特殊な神国であって、この三種の悪神の侵害を免れ、地上に厳かに、永遠に動かず、他に抜き出ていることができた。この悪霊の三つ巴のはたらきによって、諸国の国魂の神の統制力はなくなり、地上の世界は憤怒と、憎悪と、嫉妬と、羨望と、争闘などの諸々の罪悪に充ち満ちて、102 ついには収拾出来ないほどの三界の紛乱状態を作り上げたのである。

四、

ここで、天上においでになられます⑩至仁至愛の大神は、このままでは神界、現界、幽界も、共に滅びる外はないと観察なさいまして、ふたたび国常立尊をお呼び出しになって、神界および現界の建替を委任されることになった。さうして⑪<sup>ひつじきのこんじん</sup>坤之金神をはじめ、金勝要神、竜宮乙姫、日出神が、この大神業を補佐なさることになり、残らずの金神すなわち天狗たちは、おのおの分担に従って御活動申し上げ、白狐は裏方として、それぞれ神務に参加することになった。そこで高天原においでになる天津神の正統である、⑫<sup>このはなさくや ひめのみこと ひこほ ほてみのみこと</sup>木花咲耶姫命と彦火々出見命は事態が容易ではないと御考えになって、国常立尊の神業を御手伝ひ遊ばすことになり、正神界の御政策は着々とその歩を進めておられるのであります。それと共にそれぞれ縁のある身魂は、すべて地の高天原《綾部の大本》に集まり、神界の修行に参加し、御政策の端なりとも奉仕されることになっているのである。

五、

だいたい太古、日本は大国主命が武力をもって、天下を治めて居られた。天孫降臨に先だち、天祖（天照大神）は第三回まで天使を御派遣になり、ついには武力 103 を使って⑬大国主命の権力を制止なさった。大国主神もお力が尽きて、現界の御政権を天の命令のままに天孫にお返しになり、大国主御自身は、青葉のついた芝の垣にかくれて御子の事代主と共に、⑭<sup>かくりよ</sup>幽世《幽界》を統治なさることになった。

この時代の天孫の御降臨は、現在の日本という地上の小区劃を御支配なさるためではなく、実に全地球の現界を統治するための御降臨で御座いました。しかしながら未完成な世界では、憎悪、憤怒、怨恨、嫉妬、争闘等あらゆる邪悪が充満しているために、天の大神様の御大望は完成するにいたらず、従って⑮弱肉強食の争いの場所と成ってしまい地上の神界、現界は、ほとんど崩壊しようとする深刻な状況になったのである。

六、

こうした情勢を御覧になった天津神様《天の御三体の大神》は、命令をお下しになって、盤古大神は地上一切の幽政《幽界を治める》の御権利を良<sup>うしらのこんじん くにとこたちのみこと</sup>金神国常立尊に、ふたたびお返しになる、いたしかたのない状況となった。ここに盤古大神も既に時節のきた事を知り、すなおに大神様の御命令につつまで従いなされた。それなのに八王大神以下の国魂は、邪神のためにその精霊を全く 104 汚されきっているのに、まだまだ改心することができず、いろいろの悪策を巡らしていたのである。なかには改心の前ぶれが幾分見えた神もあった。

この様にして国常立尊が、完全に地上の神界を御統一になるべき時節は、もうそこまで近づいている。神界の様子が現界に移ってきて、神界の平定後は、国常立尊は幽政を一手に掌握なさって、大国主命は日本の幽政を御支配になるはずである。しかし現在ではまだ、八頭八尾の大蛇、金毛九尾の悪狐および鬼の霊は、盤古大神を擁立して、幽界および現界を支配しようと、諸々の悪計をめぐらしつつあるのである。

しかしながら従順な盤古大神は、神界に対するこのような反逆に賛同されないで、邪鬼の霊はみづからが頭目となり、赤色旗を押立てていろいろの身魂をその手下に使いながら、高天原乗取策を講じている。

そこで天からは事態は容易ではないとして、⑯御三体の大神が地上に御降臨になられて、国常立尊の御経綸を加勢なさることになり、国常立尊は臨時のお宮を綾部の本宮山に建設して、御三体の大神様をお迎えなさることとなるのである。

105 じたがって、御三体の大神様のお宮ができたなら、神界の経綸が一層進んだ証拠だと推測することができる。

一、

我々の生活のなかでは、時間（四次元）と空間（三次元）ははっきりしています。時間や空間は一瞬で飛び越えることはできませんが霊界（神界と幽界）では超えられるようです。従って、時間という点では眼に映った霊界の事象は前後することもあるようですが、過去、現在、未来の区別が推測できるとあります。

我々が霊界に関して見る映像や現在居る場所とは異なった場所の風景を見る（透視）のを霊眼といい、平面的でちょうどTVや映画を見ているような状態でありましょう。

聖師が経験した霊界での事柄は「今回の三千世界（神界、幽界、現界の三界。または過去、現在、未来と云う意味もある）の大神劇に際して、桧舞台に立つ霊界の役者たちの霊界での行動と現界での行動は一致する」とあり、このあとの25章以降に展開する物語は大神劇で大古で演じられた神劇が再び近代でも演じられたのです。即ち大古の事実が大本開教以降の大本で演じられたのです。そして今も続いています。それで人によって霊界物語の話は単なる大本の歴史ではないかと擲擧する所以です。

我々は自分で一生懸命神業に奉仕していると思っしている事が、実は舞台の上で役を演じているに過ぎず、弥勒の世が来たときみんなが集まり、ああであったこうであったと笑い合う時が来ると書かれています。さて我々はただの通行人なのか、一言でも台詞のある少しはましな役なのであろうか。出来ることなら良い役がいい。それは正しい信仰に励まなければ、神様がよい役を用意してくださっていたのに期待に応えられず、高姫のように悪役を演ずることになりはしないだろうか。

二、

大古は国祖国常立尊は地上神界（地上には神界と、現界がある）の主宰神でしたが悪神によって隠退させられます。本文にあるやむを得ない事情とは！

国祖はとても厳格な神で少しも曲がったことを許されない神です。初めの数百年はよかったのですが、油が少しずつしみ込んで行くように悪が次第に人々の心を蝕んで行きます。そして、国祖の神政を疎ましく思う神々が、自分が国祖に変わって天下を治めようとしします。そこで、悪神は国祖神政に携わる神々を権謀術数をつくして国祖から排除します。また世界の主要な十二の地点には、国祖が任命されたその地を守護する国魂神である八王神やその宰相神である八頭神達がいたが十地点までが邪神に籠絡され、ついに国祖を無理矢理隠退に追い込んだのです。その首謀者が八王大神とその妻常世姫です。それ故八王大神は国祖に変わる神として盤古大神を担ぎ出し、世を治めようとしたのです。

その後、地上では素盞鳴尊が治めておられますが高天原の変で追放され野に下られます。一方天孫降臨以前までは明確な国という概念がなかったのですが、天孫降臨によって日本国が建てられその後は多くの国が建設されます。国祖に変わって日本にきた盤古大神が世界を統治しますが、しかしそうした時代も長く続かず、世はますます覇権を争い混乱時代に入っていったのです。

三、

表面神々の闘争であるように見えるが、その実は神々に憑依した三種の悪神（八岐大蛇や悪狐、邪鬼）に心曇らされ、操られた結果です。

ロシアに生まれた八頭八尾の大蛇の霊が<sup>みたま</sup>を分けて、国々の国魂神および番頭神である八王、八頭の身魂に憑依し、次第に神界を悪化させながら現在にいたったのです。そして、インドに生まれた金毛九尾白面の悪狐は八王、八頭の妻神に憑依します。また別にユダヤに生まれ邪鬼は神界並びに現界の組織を打ち壊して、自分が盟主となって、全世界を地獄の一つである<sup>ようみ</sup>妖魅界にしようと企んでいるのです。

日本はこの三種の悪神に犯されることなく地上に厳かに、永遠に動かず、他に抜きん出ていることができたのは、日本の国は国祖が天地剖判の折、竜体で活躍なされた姿そのものであり、ご神体である特別な神国であるからです。しかし世界はこの悪霊の三つ巴のはたらきによって、諸国の国魂の神の統制力はなくなり、地上の世界は憤怒と、憎悪と、嫉妬と、羨望と、争闘などの諸々の罪悪に充ち満ちて、ついには收拾出来ないほどの三界

の紛乱状態を作り上げたのです。

四、

ここに天の<sup>ミ</sup>至<sup>ニ</sup>仁<sup>ニ</sup>愛<sup>ニ</sup>の大神様はこのままでは神界、現界、幽界の三界は、共に滅びる外はないと観察なさいまして、ご隠退時のお約束通り国常立尊をお呼び出しになり、神界および現界の立替えを委任されます。そして多くの正しい神々様、またその家来の神が綾部の大本に集まりお手伝いになるのです。

五、

ここに天孫降臨と大国主の国譲りは事実であるようです。現界での統治権を天孫に譲られたのです。天孫は全世界を統治されるために降られたのですが、しかし、未完成な世界では、憎悪、憤怒、怨恨、嫉妬、争闘等あらゆる邪悪が充満しているために、天照大御神様の御大望は完成するにいたらなかった。それはこの世が弱肉強食の争いの場所と成ってしまい地上の神界、現界はまさに崩壊しようとする深刻な状況になったのです。

ここで現代が弱肉強食の時代であると云うことをもう一度真剣に考えていただきたいのです。

六、

世界はもうどうにもならない状態に至ったので大神は盤古大神に幽政（幽界を治める）の御権利を良<sup>うしろのこんじん</sup>金<sup>くにとこ</sup>神<sup>くにとこ</sup>国常<sup>くにとこ</sup>立尊<sup>たちのみこと</sup>に、お返しになるよう命じられた。処が、その下にいる八王大神以下の国魂は、邪神のためにその精霊を全く汚されきっているので、まだまだ改心することができず、いろいろの悪策を巡らしていたのです。

盤古大神が神界に対する反逆に賛同しないので悪神は自分が頭目となって共産主義や悪思想を使って高天原乗取策（世界制覇）を狙っています。そこでいよいよ世の終末が近づいたとして御三体の大神様がお約束通り地に下りお手伝い遊ばすこととなったのです。綾部の本宮山にお宮が建設されれば、御神業は一層進んだことになるのです。

## 用語の解説

### ① 霊眼

霊界の出来事が過去、現在、未来を超越して心の眼に映ること。昔は聖師の許しを得て霊眼が利く人がそれなりに居たようです。現代人の中には憧れる人もいるかも知れませんが、果たして良いことなのか疑問です。それは、見たことの判断を誤ると大変なことになるからです。また、霊界は魂の世界であることから、多くの場合己が所属する世界（幽界）しか見ることは出来ないのです。

玉鏡 658「霊眼」に

湯ヶ島温泉に居て、百三十五ヶ所の新名所を霊眼で見た儘、歌に詠んで置いた。或る名所の茶店には朝日煙草が三個しかなかつたのも見えたし、宿屋の看板から電話の有無まで見えて来る。霊眼で見て居ると、実物を見て居るよりも遙に美しく見える。恰もつまらぬ雪隠小屋でも写真で見れば美しく見えると同じ道理である。王仁の眼は空間的に遠近を問はないだけではなく、時間的にも時代を遡つて昔の事も見えるし、又これから先の事も見える。それでなくては皆を指導する訳には行かぬ。一寸先の事も見えぬのだから、お前達は小理屈を云はずに黙言つて従いて来ればよいのである。

水鏡 077「正夢と霊夢、霊眼」

正夢は時間、場所、事柄等、見た通り些しも違はず実現するものである。霊夢は比喩的に見せられるから、其判断を誤ると間違つて来る。假へば、空にお月様が二つ出た夢を見たとする、二月とも取れるし、又あるべからざる事実として凶兆とも取れない事は無い。故に正しい判断をせねばならぬ。霊眼もこれと同じであつて、見せられた事が本当であつても、其判断のしかたを知らねば間違つて来る。空に五五と云ふ文字が現はれたとしても、五十五日、五十五年、五月五日、五年五ヶ月、二十五日、と幾様にも取れる。正しい判断の仕方があるのである。或人に霊眼を許してまだ其判断の方法を教へないで置た。ところが其人は自己判断でいろんな事を云ふたが間違ひだらけである。又〇〇中将に霊眼が開けて、早くからあの大正十二年九月一日関東地方に起つた大地震の光景を見て居た。唯、時の判断を間違へて、すぐ其事が実現

することと思ひ、時の大官連に予言警告を發した。私は其事を知ると共に其誤りである事を通知し、直ちに取消すやうと電報で何度も云ふてやつたが、自分の靈眼を信じ切つて居るので、何と云ふても聞かなかつた。其時大本に於ける所在御神殿の扉が、【ガタガタ】、【ガタガタ】と鳴つて、大変な事であつた。時を判断することを誤つて居るのであるから、其日が来ても何事も起つて来なかつた。無論大震災などが起る訳が無い。某氏は耻かしくて世間へ顔出しもならない羽目に陥つた。と同時に大本の神様に対して可なり大きな御迷惑をかけたものである。

## ② 神 劇

大本に起こることを神劇と表現しています。劇であれば台本があり、ストーリーはすでに決まっているはずですが。この世の過去、現在、未来は神の計画通りに進んでいることとなります。そうでなければ未来の出来事を靈眼で見るとは出来ません。計画を立てられたのはどの時点であろうか、神がこの世をお造りにつたときか天地が割判（分かれる）したときか、もっと後なのか、いずれにしろミロクの世界が来ることは確実です。

大本には三段の型という考え方があります。これも計画書が出来ているからこそ順序よく進むのです。企業で製品を開発するとき①コンセプトを決め、②試作品を作り、③発売製品を製造し販売へと進むように。

## ③ 天 界

第5章「霊界の修業」に

『霊界には天界と、地獄界と、中有界との三大境域があつて、天界は正しき神々や正しき人々の靈魂の安住する国であり、地獄界は邪神の集まる国であり、罪悪者の墮ちてゆく国である。そして天界は至善、至美、至明、至樂の神境で、天の神界、地の神界に別れてをり、天の神界にも地の神界にも、各自三段の区劃が定まり、上中下の三段の御魂が、それぞれに鎮まる樂園である』とあります。

ここでの天界は天の神界で天照大御神が御支配になり、地の神界は国常立尊が御支配になっておられたのです。

## ④ 表の神論

神論は開祖が書かれた一万巻におよぶ『御筆先』を取捨選択し、ひらがな文に漢字を当てて大正六年より機関誌「神霊界」に発表されたもので、現在『大本神論』として愛善世界社から全五巻が出版されています。表は開祖の神論であり、聖師が独自に書かれたものを裏の神論といいます。

その他に、開祖が昇天された後、聖師が伊都能売御魂となられて書いた伊都能売神論があります。

## ⑤ 八王大神

第二巻総説に「八王大神常世彦は、盤古大神の水火より出生したる神にして、常世の国（アメリカ）に靈魂を留め、常世姫は稚桜姫命の娘にして、八王大神の妃となり、八王大神の靈に感合し、つひには八王大神以上の悪辣なる手段を用ひ、世界を我意のままに統轄せむとし、車輪の暴動を継続しつつ、その靈はなほ現代にいたるも常世の国にとどまつて体主靈從的世界経綸の策を計画してをる。

ゆゑに常世姫の靈の憑依せる国の守護神は、今になおその意志を実行せむと企ててをる。八王大神常世彦には天足彦、胞場姫の靈より生れたる八頭八尾の大蛇が憑依してこれを守護し、常世姫には金毛九尾白面の悪狐憑依してこれを守護し、大自在天には、六面八臂の邪鬼憑依してこれを守護し、ここに良の金神国治立命の神系と、盤古大神の系統と、大自在天の系統とが、地上の靈界において三つ巴となつて大活劇を演ぜらるるといふ靈界の珍しき物語である」と書かれています。【2/総説】

## ⑥ 国魂の神

一般に神道では国玉神、国霊神とも呼び、国土そのものの靈格の存在を信じ、これを国魂神と称する。「延喜式神名帳」にも全国十七ヶ国にわたって載せられている。大本では世界各地（北半球十二の主要地点）の国土を守護する神です。

⑦ 八王八頭

国祖から任命され、世界各国（十二柱）の国魂の神を八王と云い、直接の統治はせず、神の神勅を受け指導する立場にある神で、八頭は八王の下にあって直接の統治をする宰相神をいいます。

⑧ 言向和された

「言向和す」は言霊（美しい言葉）を以て相手の心を和ませることを言います。

多くの人は敵対する相手が暴力で向かってきたとき暴には暴をもってするが、大本の教えでは力で相手を押さえつけても完全な服従はなく何時かまた反抗します。しかし、言葉（善言美詞）を持って相手を納得させれば反抗することは決してありません。

⑨ 邪 鬼 《八頭八尾の大蛇。金毛九尾白面の悪狐。六面八臂<sup>はっぴ</sup>の邪気》  
第十六章「天界旅行（三）」の用語解説を参照（33 ページ）

⑩ 至仁至愛の大神

至仁至愛を「みろく」と読みます。みろくは他に弥勒、五六七、ミロクとも書きます。「序」の用語解説⑤「みろく」を参照。

⑪ 坤之金神<sup>ひつじきんのこんじん</sup>

坤は方位を表し未<sup>ひつじ</sup>、申は南西の方向。艮（東北）と対になり、坤之金神は艮之金神の妻神で国常立命に対する豊雲野命<sup>とよぐもぬ</sup>（豊国主命、豊国姫命）です。

参考（ウィキペディア）

金神（こんじん）とは方位の神の一つである。

金神の在する方位に対してはあらゆることが凶とされ、特に土を動かしたり造作・修理・移転・旅行などが忌まれる。この方位を犯すと家族七人に死が及び、家族が7人いない時は隣の家の人まで殺される〔これを七殺（ななさつ）という〕と言われて恐れられた。

金神の中でも、「うしとらの金神」は「久遠国」という夜叉国の王である巨旦大王<sup>こたん</sup>の精魂とされる。巨旦大王の眷属の精魂も（普通の）金神と呼ばれる凶神となっている。

またその精魂の抜けた屍は牛頭天王によって五つに引き裂かれ、五節句に合わせて祭った（巨旦調伏の祭礼）。すなわち、

- |                      |                   |
|----------------------|-------------------|
| 1月1日——紅白の鏡餅（巨旦の骨肉）   | 3月3日——蓬の草餅（巨旦の皮膚） |
| 5月5日——菖蒲のちまき（巨旦の髭と髪） | 7月7日——小麦の素麺（巨旦の筋） |
| 9月9日——黄菊の酒（巨旦の血）     | である。【ウィキペディア】     |

ここで注意して欲しいのは「うしとらの金神」=巨旦大王（将来）とされる点で、艮の金神が悪神によって御退隠になるさい手足の爪を抜かれ五体をばらばらにされた事を物語っています。従って大本では五節句は国祖調伏の行事として行ないません。その他年越しのそば、門松などもしません。

また、備後風土記の巨旦将来、蘇民性来の話は艮の金神を悪神とする民話で、ここに出てくる牛頭天王は決して素盞鳴尊ではありません。また、茅の輪や蘇民札は買ってはいけません。

備後の国の風土記にいはいく、疫隈<sup>えのくま</sup>の国つ社。昔、北の海にいまし武塔<sup>むとふ</sup>の神、南の海の神の女子をよばひに出でましに、日暮れぬ。その所に蘇民将来二人ありき。兄の蘇民将来は甚貧窮しく、弟の将来は富饒みて、屋倉一百ありき。ここに、武塔の神、宿処を借りたまふに、惜しみて貸さず、兄の蘇民将来借し奉りき。すなはち、粟柄をもちて座<sup>みまし</sup>となし、粟飯等をもちて饗<sup>あ</sup>へ奉りき。ここに畢（を）へて出でる後に、年を経て八柱の子を率て還り来て詔りたまひしく、「我、奉りし報答せむ。汝<sup>むくい</sup>が子孫その家にありや」と問ひ給ひき。蘇民将来答へて申ししく、「己が女子と斯の婦と侍り」と申しき。即ち詔たまひしく、「茅の輪をもちて、腰の上に着けしめ

よ」とのりたまひき。詔の隨<sup>まにま</sup>に着けしむるに、即夜<sup>そのよ</sup>に蘇民と女子一人を置きて、皆悉にころしほろぼしてき。即ち詔りたまひしく、「吾は速須佐雄<sup>はやすきのを</sup>の神なり。後の世に疾気あらば、汝、蘇民将来の子孫と云ひて、茅の輪を以ちて腰に着けたる人は免れなむ」と詔りたまひき。 「備後国風土記逸文」

⑫ 木花咲耶姫命<sup>このはなさくや ひめのみこと</sup>と彦火々出見命<sup>ひこほ ほ て み のみこと</sup> ?

⑬ 弱肉強食の修羅の巷 「序」を参照 「優勝劣敗、弱肉強食の時代」 (10ページ)

⑭ 御三体の大神

第22章 「国祖御陰退の御因縁」に

そこで国常立尊はやむを得ず天に向つて救援をお請ひになった。天では天照大御神、日の大神（伊邪那岐尊）、月の大神（伊邪那美尊）、この三体の大神が、地の高天原に御降臨あそばし給ひ、国常立尊の神政および幽政のお手伝ひを遊ばされることになった。国常立尊は畏れ謹<sup>つし</sup>み、瑞<sup>みづ</sup>の御舎<sup>み あらか</sup>を仕へまつりて、三体の大神を奉迎したまうた。

出口王仁三郎著作集第一巻 太古の神の因縁 (P249) 大正七年一月五日

天之御中主大神の御精霊<sup>ごせいれい</sup>体の完備せるを、天照皇大神、又は撞<sup>つき</sup>賢木<sup>さかき</sup>巖<sup>いずの</sup>能<sup>み</sup>御魂<sup>たまあま</sup>天盛<sup>まさ</sup>留<sup>る</sup>向<sup>むか</sup>津媛<sup>つひめ</sup>之神言<sup>のみこと</sup>と称し奉る。是れ撞<sup>つき</sup>の大神なり。ツキとは無限絶対、無始無終、過去、現在、未来一貫、至大無外、至小無内の意なり。高皇産靈<sup>たかみすびのみこと</sup>之神言<sup>のみこと</sup>は霊系を主宰し玉い、其精霊体は神伊邪那岐之神言<sup>ののみこと</sup>と顕現し玉い、神皇産靈<sup>ののみこと</sup>之神言<sup>のみこと</sup>は体系を主宰し玉い、其精霊体は神伊邪那美之神言<sup>ののみこと</sup>と顕現し玉ふ。三神即一神にして瑞の身魂、三つの身魂の表現なり。斯世の御先祖にして、撞<sup>つき</sup>の大神に坐します也。開祖の『神論』には「天の御三体の大神」と称えあり、又「ミロクの大神」、「ツキの大神」とも称え奉り、又「天の御先祖様」と称え奉りあり。……

茲に於てか、剛直巖正なる国祖の出現を要するの機運到来し、撞<sup>つき</sup>の大神は、良に退隠し給える国祖を許し、再び地上の主権を付与し給いしかば、因縁の身魂出口開祖を機関として、地球の中心なる綾<sup>あや</sup>の高天原<sup>たかあまはら</sup>に現われ玉い、最初の国祖へ下し玉いたる神勅を実行すべく、撞<sup>つき</sup>の大神は地上に降臨せられ、霊力体即ち御三体の大神と現われて、現代の混乱世界を修理固成せんと、国祖国常立之尊の補佐神と成り玉い、教主（出口聖師）の肉体を借りて現われ、国祖の大業に臣事し給うに至れり。……

国常立尊は太古に於ける天照大神の位地に進まれ、撞<sup>つき</sup>の大神は太古に於ける須佐之男尊<sup>すきののおのみこと</sup>に降り玉いて、天上天下修斎の大業を成就し給う時機とは成れる也。

然れど神政成就<sup>あかつき</sup>の暁は、又元の如く、撞<sup>つき</sup>の大神は天位に復り玉い、国祖は地位に降りて臣系の職に就かせ給う可き事は、大本開祖の『神論』に明示さるる所なり。 【太古の神の因縁】

撞<sup>つき</sup>の大神は時機が来たので国祖を許し、再び地上の主権を付与された。国祖は因縁の身魂出口開祖を機関《神憑りしてお使いになる》として、地球の中心である綾<sup>あや</sup>の高天原<sup>たかあまはら</sup>《綾部の大本》に出現された。国祖の引退の際に約束された神勅を実行するため、霊力体即ち御三体の大神《ミロクの大神》は地上に降臨され、現代の混乱世界を修理固成しようと、国祖国常立之尊の補佐神と成り、教主《聖師》の肉体を借りて現われ、国祖の大業に臣下<sup>しん</sup>となって仕えられた。

本来、撞<sup>つき</sup>の大神は造化<sup>ぞうか</sup>の大言<sup>だいげん</sup>霊<sup>れい</sup>で、天に属し、君系<sup>くんけい</sup>でいらっしやいます。また、国常立之尊は地に属して、臣系<sup>しん</sup>でいらっしやいますが、撞<sup>つき</sup>の大神は世界の為<sup>ため</sup>に位地を捨て臣位に降り、其<sup>その</sup>体を素蓋<sup>すたい</sup>鳴尊<sup>なる</sup>のお生みになった三女神（誓約<sup>うけい</sup>で現れた）に姿を変えて現れ、二度目の天<sup>あま</sup>の岩戸<sup>いわと</sup>をお開きになる事になった。 【著作/太古】

力系 天之御中主大神・天照皇大神〔精霊体〕・撞<sup>つき</sup>賢木<sup>さかき</sup>巖<sup>いずの</sup>能<sup>み</sup>御魂<sup>たまあま</sup>天盛<sup>まさ</sup>留<sup>る</sup>向<sup>むか</sup>津媛<sup>つひめ</sup>之神言<sup>のみこと</sup> 三神即一神〔撞<sup>つき</sup>の

大 靈系 <sup>たかみむすびのみこと</sup>高皇産靈之神言・<sup>のみこと</sup>神伊邪那岐之神言 [精靈体]  
つ 体系 <sup>のみこと</sup>神皇産靈之神言・<sup>のみこと</sup>神伊邪那美之神言 [精靈体]  
体 の大神 ・ミロクの大神 ・ツキの大神 ]

一 神・瑞の身魂・三  
の身魂・<sup>てん</sup>天の御三



第十九章 《盲目の神使》 [十九]

現代語訳

106 私は、ある澄んだ水の流れている河の中に入って魚取りをしていた。そうすると河の岸に立って、何度も呼ぶ人がいる。その男の顔を見ると、眼がほとんど塞がっており、一ツも見えない。よくこんな眼で危い河の土堤へこられたものだと思った。

ともかく、河から上ってその使<sup>つかい</sup>の側へ寄って、

『私を呼びとめたのは何の用か』

と尋ねて見た。すると①盲目<sup>めくら</sup>の男は、

『私は地の高天原からのお使で、あなたをお迎えに来たものです』

と答えた。そこで私は、

『いや、先日、神界（ここでは地の神界を指す）を探険したが、あのやうな状態では、地の高天原も糞もあつたものではない。むしろ地獄の探険のほうが優<sup>まさ</sup>しである』

と答えた。そして、

107 『お前のような盲の使を寄こすような神なら、きっと盲の神だろう。盲が眼明きの手をひいて、地獄の谷底へ落すようなものだから行かない』

と答えた。すると其の使は、

『あなたは私の肉体を見ているのか、それとも霊を見ているのか。肉体は現存しているが、私の霊は尊いものである。しかも私の霊はすべての神に優れている』

と誇らし気にいう。急に私も行きたいような気がして、産土神<sup>うぶすなのかみ</sup>にむかってお願いをした。すると産土神が現れて、両眼に涙をたたえておられ、

『とにかく世界を救済する御用だから、行くのがよいだろう。しかし今度行ったら、容易に帰ってくることはできない。いろいろの艱難辛苦を嘗<sup>な</sup>めなければならないが、神が十分保護をするから、使について高天原へ上<sup>のぼ</sup>ってくれ。自分も産土神として名誉だから』

とおっしゃられる。そこで私はその使とともに、大橋を渡って、だんだんと何ともいえぬ、焦<sup>こげ</sup>つくような熱い空を、笠もかぶらず進んで行った。すると俄<sup>にわか</sup>にどうゆうわけか、空が真黒になって、108 雷鳴が轟きわたり、車の軸を流すほどの大雨が降ってきた。真昼にもかかわらずちよつとの先も見えない真暗闇になって、その上に風がひどく一步も進むことができない。そのとき心に思ったのは、……高天原から自分を迎えに来たというから、承知して一步足を踏みだすと此の有様である。或はこの者がそういつて、自分に苦しみを与えるために連れて行くのではないか……という思いが起ってきた。

そこでまた天然笛を取りだして吹奏した。すると雨はカラリと晴れ、雷鳴は止み、空は明るくなってきた。それから幾つも幾つも峠<sup>たけ</sup>を縫<sup>ぬ</sup>うように進むと、狭い道に差し掛かり、種々の大蛇や毒蛇が横たわっているのに出会った。

盲目の使は大蛇も平気でその上をドンドン踏み超えて行く。また蝮<sup>むし</sup>がおつても狼が足元に噛みつきかかっても、平気で歩いている。私は眼が明いているために、大蛇や、毒蛇や、狼に眼をむけ、恐怖心がおこって進むことを躊躇<sup>ちゅうちよ</sup>した。しかしながら盲目の使がする通り踏んで行けば、心配はないだろうと思い、怖々踏んで行った。そのとき天の一方から誰いうとなく、

109 『眼の見えざる者は幸なり』 という声が聞えてきた。

それから一の峠の頂上に達して、両人がそこでしばらく休息した。そのとき心に思ったのは……実にこの小さな眼が見えるばかりに苦痛な、そして不幸なことはない。私は眼が明いているため、大蛇や狼を防ごうとして、色々心配をするが、盲目はなんとも思わず、平気で進んで行く。この小さな眼を開くことは要らぬことだ。世界のことは、眼を明けない方がよい。たとえ見えていても見えないふりする方が、無難である……と覺<sup>き</sup>ることが出来た。

すると盲目の使は、ていねいに繰り返し地の高天原における種々の様子を話してくれた。以前自分の経ってきた幽界や、まだ探険をしない神界の話もした。そこで、

『貴方はどうしてこんなに詳しいことが解るのか』 とたづねた。

『あなたをお迎えに来て、お目にかかった時、あなたから光が現れて、今まで解らなかった、110 幽界の事が何もかも明瞭になって、非常に心が勇んできました』 と答へた。

そうしてその使の言うには、

『②実は大神の命令により、あなたを迎えに来たのだが、地の高天原は今悪魔が、種々と邪魔をして黒雲に包まれているので、ひそかに隠れて来たような次第です。そこで神様も単独では行かず、あなたに来てもらって、地の高天原を改造する御用をしてもらはねばならない。あなたも本当に御苦労なことです』

という。私はこの山の峠まで引っぱり出されて、こう言うことを聞かされたのである。前回の探険に懲りているからと言って、今さら女々しく引還すこともできず、行けば大変な艱難に会うことは分かっているが、氏神や、神界の命令であるから、どこまでも信じて、それに従って行かなければならないと思い、勇気をおこして地の高天原へ行くことにした。

案の定、高天原の聖地に来てみると、自分の来ることを悪魔が先に知っていて、非常にうろたえ、反抗運動の真最中であった。丁度私は、火の燃えている中へ飛びこんだような心もちがした。

聖師が開祖のもとを訪ねられる時のことが書かれています。綾部で、聖師は役員や信者から迫害や誹謗中傷（大蛇、毒蛇、狼）を受けられたが、（眼が明いているばかりに）その事が気になった。しかし、眼を閉じる（一切を神に任せて進む）事が大切だと悟られたようだ。

## 用語の解説

### ① 盲目の男

盲目の男は大本創成期の役員の一、四方平蔵氏のことです。

先に福島久の依頼で、一度綾部を訪問するが信者の邪魔が入り一旦帰る。四方平蔵氏は開祖の依頼を受け聖師に手紙を送り迎えに行く、物語には

「園部川で漁の為瓶付をしてゐたら、四方氏が訪ねて来たので、いよいよ綾部へ行く事となり、今度は落付いて教祖と共に金明会を開き、御用をする事となつた」とある。【37/23 海老坂】

### ② 実は大神の命令により

ここでの大神は良の金神国常立尊であり、同時に開祖出口なおである。四方平蔵氏は表面的には開祖の命令であるが実質は国常立尊の命令を受けて聖師を迎えに行かれたのであろう。

## 第三篇 天地の剖判

## 第二〇章 《日月の発生》〔二〇〕

## 現代語訳

115 盲目の神使に迎えられて、私は地の高天原にたどりついたが、自分の目の前には、何時のまにか、大地の主神神であられる<sup>くにとこたちのおおかみ</sup>国常立大神と、①<sup>わかひめぎみのみこと</sup>稚姫君命がお出ましになられた。自分はお言葉のままにこの両神より、貴重な望遠鏡をいただき、いよいよ神界を探検しなければならない大使命をお受けしたのである。

<sup>ちちま</sup>忽ち眼の前の光景は見るみる変わり、すばらしい高い山が、雲の上に聳え<sup>そび</sup>たっている。その山にはケーブルカーのようなものが架っていた。私は登ろうと思って、一步麓の山路に足を踏みこむと、不思議や、身体（五体）は何物かに引上げられるような心持になり、直立したままスーと昇ってゆく。

これこそが、仏教で云う、②<sup>しゆみせんざん</sup>須弥仙山で、宇宙の中心に無限の高さをもって立っている。それは決して、肉眼で見る種類の、現実的な山ではなくて、全く靈界の山であるから、私としても<sup>のぼ</sup>霊で上ったので、決して肉体で上ったのではない。

一、 116 私は須弥仙山の頂上に立って、大神より頂戴した望遠鏡を取り出して、八方を眺めはじめた。すると広く遙かな宇宙のはっきりとしない中に、<sup>まる</sup>どこともなしに一つの球い<sup>かたまり</sup>凝塊ができるのが見える。

それはちょうど<sup>まり</sup>毬のような形で、周辺には一杯に泥水が漂よっている。見るまにその球い<sup>かたまり</sup>凝塊は<sup>ゆる</sup>膨張して、宇宙全体に広がるように思われた。やがて眼もとどこかぬほどの遠方にまで到達したが、球形の真中には、<sup>あざや</sup>鮮かな金色をした一つの円柱が立っていた。

円柱はしばらくすると、③自然に左に回<sup>まわ</sup>転運動をはじめた。周囲に漂う泥は、円柱の回<sup>まわ</sup>転につれて渦巻きを描いていた。その渦巻きは次第に外周へ向けて、大きな輪に広がっていった。はじめは<sup>ゆる</sup>緩やかに直立して回<sup>まわ</sup>転していた円柱は、その速度を加えるにつれ、次第に傾斜の度合いを増しながら、目に見えぬほどの速さで、回<sup>まわ</sup>転しはじめた。

すると、大きな円い<sup>きゅう</sup>球の中より、暗く黒色の小さな塊<sup>かたまり</sup>が振り放たれるようにポッポッと飛びだして、宇宙全体に拡散する。よく注意して観察するとそれは無数の光のない黒い<sup>ほ</sup>星辰となつて、或ひは近く、或ひは遠くの位置にあつて左に回<sup>まわ</sup>転するように見える。後方に太陽が輝きはじめると共に、117 それらの<sup>もろもろ</sup>諸々の星は皆一斉に輝きだした。

二、 その金の円柱は、すぐに竜の形に変化して、その円い大地の上を東西南北に駆けめぐりはじめた。そしてその竜体の腹から、口から、また全身から、大小無数の竜体が生れ出た。

④金色の竜体と、それから生れ出た種々の色彩をもった大小無数の竜体は、地上の各所を泳ぎはじめた。もとも大きな竜体の泳ぐ波動で、泥の部分は次第に固くなりはじめ、水の部分は薄くなり、そして水蒸気は天に昇る。そのとき竜体が尾を振り廻すたびに、その泥は波の形になる。もとも大きな竜体の通った所は大山脈が形づくられ、中小種々の竜体の通った所は、またそれ相応の山脈が形づくられた。低い所に水が集り、こうして海もまた自然にできることになった。この最も大きい御竜体を、大国常立命と申し上げることを私は知った。

宇宙はその時、<sup>おぼろづきよ</sup>朧月夜より少し暗いくらいの状態であったが、広々とした海の中と思われる所ろに、突然、⑤銀色の柱が突き出てきた。その高さは非常に高い。それがにわか<sup>に</sup>に 118 右回りに回<sup>まわ</sup>転をはじめた。その旋回につれて柱の各所から種々の草木の種が飛び散るよう<sup>ま</sup>に現れて、山野河海の総てに撒き散らされた。しかしまだその時は人類は勿論、草木、鳥獸、虫魚の類<sup>たぐい</sup>はなにも発生していなかった。

急に銀の柱が横向きに倒れたと見るまに、銀色の大きな竜体に変っている。その竜体は海上を西から東へと、泳いで進みだした。この銀色の竜神が<sup>ひつじさるのこんじん</sup>坤<sup>こんじん</sup>金神と申すのである。

また東からは国祖大国常立命が、金色の大きな竜体を現わして、固まりかけた地上を馳せてこられる。<sup>ふた</sup>両つの御竜体は、双方より顔を向き合<sup>あ</sup>わして、何ごとかを相談された様子である。しばらくの後金色の竜体は左へ旋回しはじめ、銀色の竜体はまた右へ旋回し始められた。そのため地上は恐ろしい音響を発して震動し、大地はその

震動によって、非常な光と輝きを放射しだした。

三、このとき金色の竜体の口からは、大きな赤い色の玉が大音響と共に飛びだして、まもなく天へ騰って太陽となった。銀色の竜体はどうかと見れば、口から霧のような清水を噴きだし、119 まま水は天地の間にわたした虹の橋のような形になって、その上を白色の球体が騰ってゆく。このとき白色の球体は太陰（月）となり、虹のような尾を垂れて、地上の水を吸いあげる。地上の水は見るまに、その量が減ってくる。

金竜は天に向って息を吹かれる。その形もまた虹の橋をかけたように見えている。すると太陽はにわか光を強くし、熱を地上に放射しはじめた。

四、水はようやく減ってきたが、山野は搗たての団子か餅のように柔かかった。それも次第に固まってくると、前に播かれた種は、そろそろ芽を出しはじめる。一番初めに山に松が生え、荒地には竹が生え、またあちらこちらに梅が生えだした。続いて杉、桜、榎などという木が、山や原野のところどころに生えてきた。つぎに全ての草木は芽を吹き、今までまるで土の塊で作った胞殻《ほうらく。素焼きの平たい土鍋》をふせたような山が、にわか青々として、美しい景色を現してくる。

地上に青々とした樹木が生え始めるとともに、今まで濁って赤褐色だった天は、青く藍色に澄みわたってきた。そうして濁りを含んで黄色味をおびた海の水は、天の色を映したように青くなってきた。

120 地上がこうして造られてしまうと、元祖の神様も、もう御竜体をお持ちになる必要がなくなられたわけである。それで金の竜体から発生になられた、⑥大きく剣の様な膚を持たれた厳めしい角の多い一種の竜神は、人体へと変化して、極めて尊く厳で立派な人間の姿に成られた。これはまだ本当の現実世界の人間姿ではなくて、霊界における人間姿であった。

このとき、太陽の世界では、⑦伊邪那岐命がまた霊体の人の姿で出現に成られて、その神を手招きされる。そこでとても尊い、あの立派な大神は、天に上って⑧撞の大神とおなり遊ばし、天上での主宰神とお成りになられた。

白色の竜体から発生になられた一番力ある竜神は、また人格化して男神となってお現れになった。この神は非常に顔かたちが美しく、色白で大英雄の素質を持っておられた。その黒い頭髪は、地上に届くほど長く垂れ、髯はお腹まで伸びている。この男神を⑨素盞鳴大神と申し上げる。

自分はその男神の神々しい姿に打たれて眺めていると、その御身体から真白の光が現れて、121 天に高く登り月界へお上りになってしまった。これを月界の主宰神で月夜見尊と申し上げるのである。そこで、大国常立命は太陽、太陰の主宰神が決まったので、御自身は地上の神界を御主宰になられることになり、須佐之男大神は、我々の住む地上物質界の主宰とお成りになったのである。

第三篇より、いよいよ神界の探検に入ります。宇宙創造の場面に入り、天地の剖判（分かれる）を須弥仙山の頂よりご覧になります。

一、

この文章はかなり大ざっぱに書かれているので大変判りづらい気がします。

霊的に見る世界なので時間空間を超越しており、須弥仙山もまたそうだが、この冒頭の表現は我々が映画館で大きなスクリーンを見ているような感じがします。遠く遙か宇宙の彼方にある小さな球体が、次第にズームアップし、画面一パイに広がり、その中に金色の円柱が立っている光景です。

宇宙は丸い鞠のような形であることが解る。初め「周辺には一杯に泥水が漂よっている」と宇宙（鞠の表面）は泥水の塊のようであったとあります。この表現は比喩であって、あたかも宇宙の外に身を置いているように表現していますが、はたして宇宙に外があるのだろうか。聖師は宇宙に外があったとしてもその外に何があるかを考えることは詮ない事と言っています。それとも、霊眼で見ているのでスクリーンを見ているような、こうした表現になったのでしょうか。

別の表現では、宇宙に一点の<sup>ホテ</sup>（極小さな塊）が現れそれが次第に広がり、宇宙大にまでなったともあります。現代宇宙科学のビックバンに似ています。いずれにしても宇宙は円形である、それは水の粒子が円形であるからであると示されています。

泥水の固まりのような宇宙は回転して、澄んだものは天に昇り、濁ったものは地となって天と地の剖判が成立します。

宇宙の中心に立っていた円柱は左廻転を始め、次第にその速度を速め横になって眼に見えぬほどの速度で廻転した。するとその中から光のない星が外に飛び出し、太陽が輝くとそれらの星も一斉に輝きだします。

「すると、大きな円い<sup>きゅう</sup>球の中より、暗く黒色の小さな塊<sup>かたまり</sup>が振り放たれるようにポッポッと飛びだして、宇宙全体に散乱する」この表現の「大きな円い球」とは宇宙そのものなのか、宇宙の中の一つの塊なのか。「宇宙全体に散乱する」とあるから一つの大きな球（塊）なのであろう。そこから<sup>ほし</sup>星辰が飛び出したのです。そして太陽が出来ると共にそれらの星も輝き始めるのです。

二、

場面が急に変わったようで、円柱から変わった竜体がいるのは球体と思っていたが、ここでは丸い形の平面となってしまったので天地は天と地に分かれたようだ。

金色の竜体から大小無数の竜体が生まれ、「地上の各所を泳ぎはじめた」とあるのでその半球は地上らしい。泥の中を竜が泳ぐと波動で波打ち高低差ができ、山が形成され低いところに水が溜まり海となる。

金色の円柱から竜体に変わられた最も大きい御竜体を、大国常立命と申し上げる。

「宇宙はその時、<sup>おぼろづきよ</sup>朧月夜より少し暗いくらいの状態であった」とある。

突然、海の真ん中から銀色の柱が突き出て右旋回転を始め、そこから種々の草木の種が飛び散り、山野河海の総てに撒き散らされた。しかし、この時点ではまだ人類は勿論、草物も動物もなにも発生していなかったようだ。銀色の柱が倒れ竜体となられ神を坤金神と申しあげる。

金色と銀色の竜体は東と西から馳せてこられ、ご相談のうえ左と右に分かれて旋回し始められた。その結果「地上は恐ろしい音響を発して震動し、大地はその震動によって、非常な光と輝きを放射しだした」とある。

三、

金色の竜体の口からは、大きな赤い玉が大音響と共に飛びだして、まもなく天へ<sup>のぼ</sup>騰って太陽となった。銀色の竜体の口から霧のような<sup>せいすい</sup>清水を噴きだし、まもなく水は天地の間にわたした虹の橋のような形になって、その上を白色の球体が<sup>のぼ</sup>騰ってゆき太陰（月）となった。太陰は地上から水を吸い上げ地上の水は見るまに、その量が減っていった。金竜は天に向かって息を吹かれ、それが虹の橋をかけたように見えている。すると太陽はにわかに光を増し、熱を地上に放射しはじめた。

四、

水が引き始め大地がつかたての餅のようになると、以前に播かれた種が芽を出し、一番初めに山に松が生え、荒地には竹が生え、あちこちに梅が生えだした。続いて杉、<sup>ひのき</sup>榿、<sup>まき</sup>檜など木が、山や原野のところどころに生えてきた。つぎに全ての草木は芽を吹き、今までまるで土の塊<sup>かたまり</sup>で作った<sup>ほうろく</sup>胞烙（鍋）をふせたような山が、にわかになりに青々として、美しい景色を現してくる。全て短い文章で表されているが何十億年という歳月を費やしている。

それに連れて今まで濁って赤褐色だった天は、青く藍色に澄みわたり、濁りを含んで黄色味をおびた海の水も天の色を映したように青くなってきた。

「地上が出来上がると神様も巨大な力を発揮するための竜体を持つ必要がなく、極めて尊厳ある人間姿へと変わられたのである。これはまだ本当の現実世界の人間姿ではなくて、靈界における人間姿であった。」とありこの話は靈界の話である。

伊邪那岐命は幽の頭の世界の神様であり、天界には太陽の世界と太陰の世界がある。大国常立命は天に上って撞の大神となられたのである。

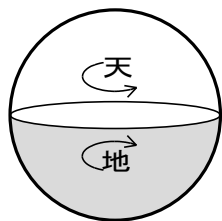
また、白色の竜体から発生になられた神は素盞鳴大神でそのお姿が<sup>えが</sup>書かれている。ここで突如白色の竜体と出て

くるがこれは銀色の竜体が変化したものと思われる。

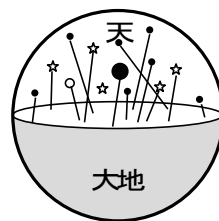
「<sup>おおくにことたち</sup>大国常立命は太陽、太陰の主宰神が決まったので」とあるが太陽の主宰神はここには出てこない。第22章に太陽の現界の主宰神を天照大御神で、太陰の現界を月読命と書かれている。



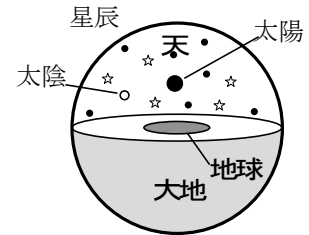
宇宙は球体で  
全体が泥海



天(澄)と地(濁)  
に分かれる



大地より日月星辰  
が分離し生まれる



大地の中心に地球が出来る

### 天地剖判の概念図

整理すると

球い凝塊（鞠の様で周辺は泥水が漂う）→ それ宇宙大に拡がり→ 球形の真中に金色の円柱が立ち左旋運動をする → 次第に澄んだ物は天に、濁った物は地に分かれる（剖判）→ 大地より星辰が宇宙に飛び出す（無数の光のない星）→ 金色の竜体より太陽が、銀色の竜体より太陰が生まれ→ 太陽の輝きに連れ<sup>ほし</sup>星辰もまた輝く→ 大地の水が引くと山野に植物の種が芽を吹き出す

金色の竜体＝(国祖) 大国常立命＝撞大神・・・天上の主宰神

銀色の竜体＝坤金神・・・白色の球体（月）・・・白色の竜体＝素盞鳴大神・・・月界に登られ＝月夜見尊（月界の主宰神）

### 用語の解説

#### ① 稚姫君命

記紀神話では天照大神の御妹、斉服殿に坐して神衣を織り給うた神。大本では開祖の御身魂【卷末注】第21章に「それから大神《国常立命》は天の太陽、太陰《月》に向わせられ、陽気と陰気とを吸いこみたもうて、息吹の狭霧を吐きだしたもうた。この狭霧より現れたまへる神が<sup>わかひめぎみの</sup>稚姫君命である」とあります。

#### ② 須弥山

須弥山（しゅみせん、本来の名称は須彌山、サンスクリット Sumeru、スメール山）とは、古代インドの世界観の中で中心にそびえる山である。インド神話ではメル山、メルー山ともいう。

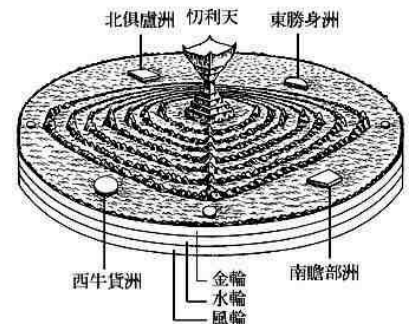
概要： 仏教の世界観では、須弥山をとりまいて七つの金の山と鉄圍山が<sup>てつちさん</sup>あり、その間に八つの海がある。これを<sup>きゅうざんはつかい</sup>九山八海という。

「須弥」とは漢字による音訳で、意識は「妙高」という。

仏教における須弥山の世界観

『俱舍論』によれば、風輪の上に水輪、その上に金輪がある。また、その最上層をなす金輪の最上面が大地の底に接する際となっており、これを<sup>こんりんざい</sup>金輪際という。なお、このことが俗に転じて、物事の最後の最後までを表して金輪際と言うようになった。

我々が住むのは海水をたたえた金輪に浮かぶ<sup>せんぶしゅう</sup>贍部洲（<sup>えんぶた</sup>閻浮提、Jambū dvī pa）であり、須弥山中腹には日天と月天がまわっている。須弥山の高さは八万 由旬（yojana）といわれ、中腹に四天王天がおり四洲を守る。さらにその上の山頂の<sup>ちりり</sup>切利天には帝釈天が住むという。須弥山の頂上に善見城がありインドラ（帝釈天）



が住んでいる。

須弥山には甘露の雨が降っており、それによって須弥山に住む天人たちは空腹を免れる。 【ウィキペディア】

③ 自然に左旋運動をはじめ

左は霊系であり、左回転されたので金色の竜体の神は霊系の神である。また、右は体系で、右回転されたので銀色の竜体の神（坤金神）は体系の神であることがわかります。

④ 金色の竜体

国祖大国常立尊で霊系を表す

⑤ 銀色の柱

国常立尊の妻神豊雲野尊とよぐもぬのみことであり、体系を表す。

⑥ 大きな剣膚いかの厳めしい角の多い一種の竜神

この竜神は国常立命である。伊都能売神諭ではご自身のことをたち剣膚たちばなで角が八本あると書かれています。

⑦ 伊邪那岐命いざなぎのみこと

幽の幽の世界で霊系の祖神である高皇産霊大神が御精霊体を持たれ、幽の顕界に現れられたときの神名。

⑧ 撞の大神

第 18 章 用語解説 ⑮ 御三体の大神を参照。

⑨ 素盞鳴大神すきのみのおおかみ（月夜見尊つきよみのみこと、須佐之男大神すきのみ）

本文にあるように坤金神（豊雲野尊）からお生まれになった神、月界に登られて月読命と名が変わられた。働きは我々が見ている月は月読命（太陰の現界の主宰神）であり、その裏面が素盞鳴命である。また須佐之男命と申し上げるときは古事記等が出てくるように大海原（地球・大地）を治められるときの神名であります。

詳細は別稿「素盞鳴尊とは」（現在制作中）を参照

